

2022/2/3

(新シリーズ オマケの日本語教室 「いい加減」) 書庫版



本日は節分。

あの「鬼は外、福は内」の節分です。

節分とは書いて字の如く「節を分ける」つまり時節、季節を分かつという事でしょう。

ならば何の節を分かつのかと申せば、多分冬と春の時節を分かつ、なのではなからうかと。

そこから連想して「冬（疫病の季節）を鬼」「春（回復の季節）を福」と見做せば「早く冬は出ていけ。春よ、早く入ってこい」とも読めます。

てえな事を落語風にぼんやりと考えていましたら、ふと

「そういえばオマケの英語教室を書いているのに何で日本語教室を書かないでいたのか？」という非常に単純な疑問が湧いて参りました。

奇しくも前回だか前々回だかの「オマケの英語教室」の記事の中で確か

「英語は的確適語に絞り込む言語ではなく、中核イメージを展開する言語であるという事を理解する為には、まず日本語の成り立ちや構造を理解する事が大切（先）だ」という意味の事を書いた経緯もあってそんな疑問を抱いたのかもしれない。

なので、本日より「オマケの英語教室」の姉妹編「オマケの日本語教室」を始めようかと思えます。

で、手始めに本日のお題は

「いい加減」

我が国の日常会話の中では、この「いい加減」という言葉は大抵悪い意味で用いられております。

例えば

「いい加減な事を言うな」

での「いい加減」は「でたらめな事」を表しておりますし

「いい加減にしろ」では「バカな事をするのを止める」を表しております。  
ですが、その悪態をつく事を何故「いい加減」書き換えれば誉め言葉の「良い加減」という  
のか？

これは自分が思うに、まず上から申せば

「いい加減な事を言うな」

のいい加減は

「良い加減でもない事を良い加減のように見せかけて謂うな」

と解釈できそうですし

下の文の

「いい加減にしろ」

は

「度を過ぎたレベルの事をせずに、適度且つ合理的なレベル（すなわち良い加減）に戻せ  
（にしろ）」

と解釈できそうです。

つまり前段となる状況説明が省かれているだけで言っている事（表現法）自体は示している  
内容の裏返しでもなんでもなく極めて素直に「順述」している様です。

それで冒頭の「鬼は外、福は内」

も冬春の譬えを抜きにすれば、余りに鬼と福を厳密に分け過ぎて排他的姿勢や過度に自己  
防衛的になり過ぎない事も、それこそ「良い加減にしておいた方が」良いかと存じます。

余談)

そこで最近思ったのですが

「自分は短文を好み、究極的には俳句ぐらいのものにしたいと思っていたが、俳句や格言の  
中には短くする事だけを絶対命題にし過ぎた為に、却って逆の意味にとられたり、説明不足  
で十分に真意が伝わらないままでいたりするものが多い様な気がしてきた。

ならば、次の表現形式として俳句と短文の中間、即ち覚え易く且つ誤解を招かないレベルの  
ものはできないだろうか？」

と。

ヒントとしては自分が昔、露文科で専攻したチェーホフのごく初期のユーモア超短編にあ  
りそうな気もしております。